

研究報告

二つの環状ブロック群 —— 野尻湖遺跡群日向林B遺跡と貫ノ木遺跡 ——

大竹 憲 昭

はじめに

日本列島の各地で人類が残した遺跡が見つかるのは今からおおよそ三万年前で、その時代を先土器時代とよび、ヨーロッパを中心とした石器時代の区分ではおおよそ後期旧石器時代に相当するものと考えられる。この三万年前の時期に特徴的に現れる遺跡の形態に「環状ブロック群」がある。先土器時代の遺跡を発掘調査すると、遺物（石器や石片）がある一定の範囲にまとまって出土する。これをブロックと呼ぶ。ブロックは多くの場合、一基単独で発見されることは少なく、複数が共存し遺跡を形成する。環状ブロック群はブロックが連環し遺跡が形成されている。この環状ブロック群が全国的に注目されるようになった遺跡が、一九八四年に調査された群馬県下舐牛伏遺跡である。^①一九八六年に報告書が刊行されて以降、環状ブロック群への関心は高まり、橋本勝雄がいち早く集成、検討を加え、見通しをふくめ課題を出した。^②

一九九三年には、環状ブロック群をテーマとして岩宿フォーラムが開催され、環状ブロック群の集成とその解析が話題となった。その後も全国各地で類例は増えつづけ、千葉・長野では環状ブロック群が近接した遺跡や地点でも見つかるなど、環状ブロック群の様相も多岐にわたるようになってきた。

二〇〇五年には、日本旧石器学会でもシンポジウムのテーマとして取り上げ、その後の学会誌でも環状ブロック群に関する論考も特集された。^③また小菅将夫により環状ブロック群研究の先駆となった牛伏遺跡の成果をまとめた単行本も出版されるなど、環状ブロック群は今日の先土器時代研究のホットな課題のひとつと

いえよう。

環状ブロック群の性格については「大型動物解体場」、「石器交換場」、「折衷説」など、さまざまな推定がなされるとともに、この大規模な遺跡を残した集団はいったいどのような集団を想定すればよいのかといった問題も出てきている。^④

野尻湖遺跡群の環状ブロック群については高速道建設に伴う発掘調査で発見された日向林B遺跡の調査担当者である谷和隆によって分析、解釈の論考がある。^⑤いっぽう、同時期に発掘調査がなされた貫ノ木遺跡も第3地点において環状ブロック群があることを認定したが、日向林B遺跡のようにある意味整然とした環状ブロック群ではなかったため、その認定を含め性格が明確になっていなかった。本稿では日向林B遺跡の環状ブロック群と比較しながら、貫ノ木遺跡の環状ブロック群を検討し、その理解に迫りたい。

一 野尻湖遺跡群と日向林B遺跡・貫ノ木遺跡

長野県の北端、上水内郡信濃町の野尻湖底から発見された考古資料（遺物）はナウマンゾウの化石とともに古くから注目されており、一九五三年には、先土器時代のナイフ形石器をはじめ石器類が芹沢長介・麻生優らによって紹介された。^⑥

一九六二年から野尻湖底の発掘調査が始まり、一九七六年からは野尻湖周辺での陸上発掘調査も行われるようになった。そして一九九〇年代に入ると開発に伴う事前調査の件数が増えていった。

一九九五年から一九九八年にかけて、野尻湖周辺は発掘調査のラッシュとなった。上信越自動車道建設にともなう長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査は

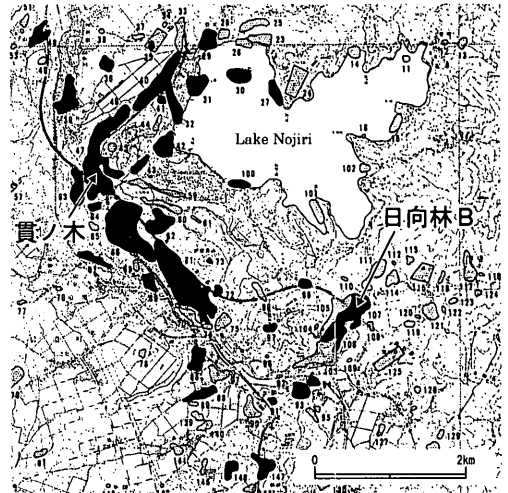


図1 野尻湖周辺の遺跡（黒塗りが先土器時代遺跡）

た。両遺跡は、野尻湖周辺に分布する先土器時代遺跡群の中であって、南端に位置する日向林B遺跡、北西端に位置する貫ノ木遺跡といったように遺跡群の中では両極をなす位置にある。ちなみに両遺跡間の距離は四キロメートルである（図1）。まず、それぞれの遺跡の立地や調査による概要をみてみよう。

1 日向林B遺跡の立地と概要

日向林B遺跡は野尻湖の西から南の丘陵地帯に密集する野尻湖遺跡群のなかでも東端に位置する。標高は六五〇メートルを測る。遺跡の東方には標高六三六メートルの沖積面が広がっており、トレンチ調査の結果、遺跡の残された当時は湖沼であったと推定されている。いっぽう、遺跡の北西方向は斜面となり比高二〇～二五メートルで丘陵頂部に至る。日向林B遺跡は湖沼を前面に臨み、背後に斜面をもつ低位のテラス上に立地していた。

上信越自動車道の調査では上下二つの石器文化を検出した。下層のVb層を生立面と推定し、斧形石器を特徴とする日向林I石器文化は三〇のブロックから石器九〇〇一点、礫七四点を検出した。本稿ではこのI石器文化について検討を加えてみたい。

非常に大規模で、多大な成果をあげた。なかでも日向林B遺跡における環状ブロック群の発掘と、一遺跡で六〇本もの斧形石器が出土したことで全国の注目を集めた。いっぽう、貫ノ木遺跡は高速道路のインターチェンジ周辺であったため調査面積も広く、五つの地点から三万七〇〇〇点ほどの石器を発掘することとなった。

他に上層からはナイフ形石器を主体とする石器文化を検出しているが、石器・礫を合わせて一三〇点で一ブロックが構成される小規模な遺跡である。日向林B遺跡の周囲に目を転じると、東に隣接する七ツ栗遺跡でも二時期の石器文化から合計八ヶ所つのブロックと四基の礫群が確認されたが、一〇〇点を超えるブロックはひとつだけで、全体的に小規模なブロックで構成されている。丘陵上の日向林A遺跡でも三つの時期の石器文化がとらえられているが、最大のブロックが二七五点、あとは一〇〇点未満の小規模なブロックで構成されている。さらにこの二遺跡ともに日向林B遺跡のI石器文化と同時期の遺跡もない。これらの状況から日向林B遺跡I石器文化の九〇〇〇点という遺物量は周囲には検出されず、一時期大規模な遺跡が形成されるが、その後、周辺には先土器時代をとおしてあまり大規模な遺跡は形成されなかったようである。その点が後述する貫ノ木遺跡とは異なる点であろう。

2 貫ノ木遺跡の立地と概要

貫ノ木遺跡は野尻湖の南西部に広がる仲町丘陵のほぼ最高位にあり、上越に注ぐ関川水系と千曲川に注ぐ鳥居川水系の分水嶺にあたる。遺跡のひろがり、丘陵に沿って長軸約一キロメートル、短軸約二〇〇メートルという広大な面積をもつ。遺跡の標高は七〇〇メートルと七三〇メートルと比高差をもち、小丘陵と低地が入り組んだ複雑な地形となっている。貫ノ木遺跡の調査は古く、一九八五年から野尻湖発掘調査団によって、その後も信濃町教育委員会によって事前調査がおこなわれ、五枚の文化層が確認されている。長野県埋蔵文化財センターによる貫ノ木遺跡の発掘調査では五つの地点を調査した。遺跡の最高地点は第2地点で小高い丘になっている。そこから小テラスが東・西・北と形成され、それぞれ地形の変換点をもとに第1地点、第3地点、第4・5地点と呼称した。貫ノ木遺跡の範囲は先にも述べたとおり広大で、各地点は通常の遺跡とほぼ同等であると考えられる。

貫ノ木遺跡では三万年前からの各期の文化層（石器文化）が検出されている。野尻湖周辺では三万年前から一万数千年前までの間にローム層の堆積が平均一・

五層ほどあり、その間に石器群は上下差をもって出土するため、石器群の単位は平面分布と垂直分布のまとまりでとらえていく。しかし各期の石器群が集中し、重複すると平面的、垂直的にもそれぞれを本来の帰属時期を分別することが困難になる。貫ノ木遺跡は石器文化のまとまりの単位をとらえることが困難であった。しかしそれは貫ノ木遺跡が先土器時代の各時期を通して遺跡が残されていたことを意味しているともいえるのではないだろうか。

長野県埋蔵文化財センターによる調査では、貫ノ木遺跡第1地点ではブロック一三か所、礫群一一基が確認され、石器二九八七点、礫六六五点が出土した。第2地点ではブロック一〇〇か所、礫群六〇基が確認され、石器九二九九点、礫五七八九点が出土した。第3地点はブロック三八か所、礫群一五基が確認され、石器八七九五点、礫一七六四点が出土した。第4地点はブロック一〇〇か所、礫群五〇基が確認され、石器一三二〇六、礫三一〇七点が出土した。第5地点はブロック二〇か所、が確認され、石器二八三七点が出土した。5つの地点から計三七二四点の石器と、二七一か所のブロックという莫大な量を出土した⁹⁾。報告書では斧形石器・砥石・ナイフ形石器・台形石器によって特徴づけられるⅠ石器文化、ナイフ形石器が主体をしめるⅡ石器文化、槍先形尖頭器をもつⅢ石器文化、そのⅢ石器文化はさらに槍先形尖頭器のあり方から三細分し、合計五つの石器文化を認定した。

斧形石器をもつⅠ石器文化が本稿の対象となる石器文化であるが、各地点の石器文化をみると第1地点が三ブロック九六一点、第2地点が一四ブロック一一八六、第3地点が三二ブロック七五三三三、第4地点が四七ブロック七九一五五である。第5地点では斧形石器を有するがⅠ石器文化に後続する石器文化であると認識している。環状ブロック群としてとらえ、分析の対象とした遺跡は第3地点であるが、その周囲にも相当数の同時期に当たるブロックが存在していて、日向林B遺跡の周囲に同時期の遺跡がなく、それ以降の遺跡も小規模であるのに対して、貫ノ木遺跡の場合は各期にわたって遺跡が形成されている。

貫ノ木遺跡の第3地点は西向きのテラス上に位置する。前面に黒姫山をのぞみ、

眼下には現在信越線が通る池尻川低地が広がるが、仲町丘陵はこの五万年間で五〇層も隆起しているため、現在の地形より三万年前の地形は比高が緩やかであったが、第3地点のテラスから低地までには西岡A遺跡の乗るテラスが存在することから、第3地点の立地は、日向林B遺跡の低地からすぐ上のテラスよりも上位に位置するテラスであるといえる。

二遺跡を遺跡立地、周辺遺跡の形成という点で比較してみると、低位のテラスに立地し、周辺にはあまり遺跡が頻繁に形成されなかった日向林B遺跡。中位のテラスに立地し周辺には同時期さらには各時期にわたる遺跡が形成された貫ノ木遺跡は明瞭な違いを示している。

二 遺物分布状況の検討

日向林B遺跡では直径約二五層の範囲に環状ブロック群が認定された。いっぽう貫ノ木遺跡第3地点で抽出された環状ブロック群は直径五〇層に及び、日向林B遺跡の二倍の直径をもつ。この二つの大きさの違いはいったい何を反映しているのだろうか。これら環状に配置されたブロック群の形成が同時期であったことを示す根拠は接合関係や同一母岩(個体)の共有である。日向林B遺跡および貫ノ木遺跡でも接合線によってその同時性が保証されたブロック群を抽出することができ、それらが環状を呈していた。日向林B遺跡では環状にめぐるブロック群の抽出はその平面分布をみても比較的容易に判断ができる。さらにその周辺に複数のブロック群が存在する。また貫ノ木遺跡では接合線により環状のブロック群が抽出できるが、その周辺にもブロック群が認められる。そこで両遺跡の詳細な検討を進めるに当たって、まず、平面分布と垂直分布に再検討を加え、グループングをおこない環状ブロック群の細かい単位をとらえることを試みてみる。

1 石器の出土状況

(1) 日向林B遺跡のブロック群(図2)

日向林B遺跡の日向林Ⅰ石器文化からは三〇ヶ所のブロックが検出されている

グループ4 環状外ブロック群のうち環状配列ブロック群に接しているBL二四〜BL三〇の七ブロック。

グループ1の環状に配置している一五のブロックは連鎖しているものとブロック間にやや遺物の空隙が見てとれる箇所がある。グループ1を細分してBL一〜BL五を一A、BL六〜BL八を一B、BL九〜BL一五を一Cとする。

では、これら三〇のブロック群の出土層位をみてみよう。日向林I石器文化と

が、これらのブロックは谷和隆により環状配列ブロック群、中央ブロック群、環状外ブロック群に分けられ、環状外ブロック群はさらに平面的に二分されている。^⑩

以下に示す四つのグループで検討してみることにする。

グループ1 環状配列ブロック群でBL一〜BL一五の一五ブロック。

グループ2 中央ブロック群でBL一六〜BL二〇の五ブロック。

グループ3 環状外ブロック群のうち環状配列ブロック群の東方に位置するBL二一〜BL二三の三ブロック。

グループ4 環状外ブロック群のうち環状配列ブロック群に接しているBL二四〜BL三〇の七ブロック。

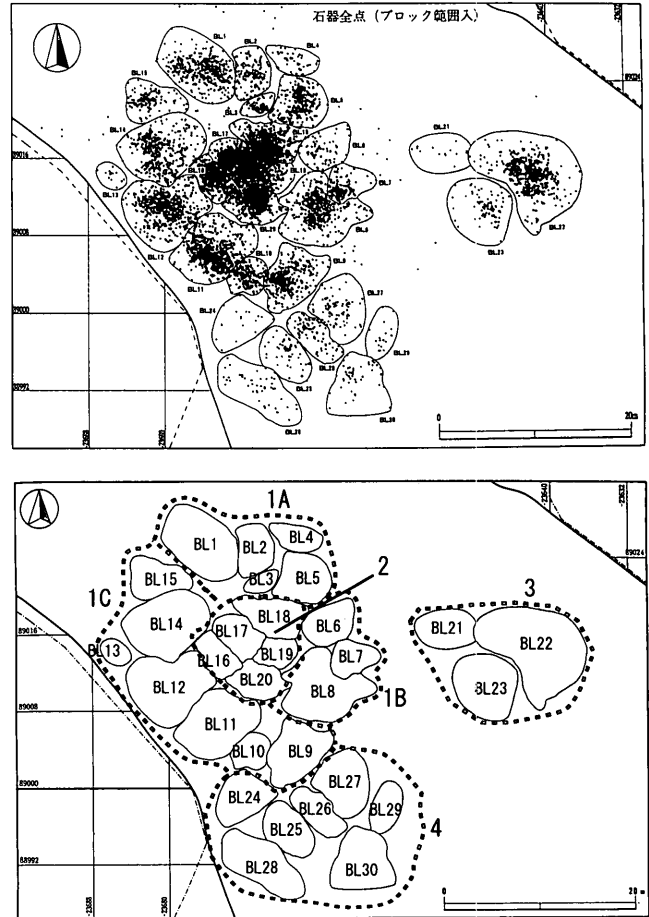


図2 日向林B遺跡のブロック配置

認定された遺物群は第I層から第VI層まで出土している。^⑪

表1にブロック別の石器出土層位を示した。全体的にはV層出土が六八〇点余で七五割を占め、IV層出土は一七三二点(一九割)と激減する、V層に出土の中心があることがわかる。ではブロックごとに出土層位の差はあるだろうか。出土層位の比率をみると五つに分けられる。

1類 Vb層からの出土が一番多く四〇割以上を占める。一一ブロック。

2類 Vb層が四〇割だが、Va層も四〇割を超える。三ブロック。

3類 Va層が四〇割以上と、最も多い。三ブロック。

4類 IV層が四〇割以上と、最も多い。四ブロック。

5類 IV〜Vb層まで各層二〇〜三〇割代でピークが明確に出ず、垂直分布としては、比較的散漫な分布を示している。九ブロック。

環状配列ブロック群と中央ブロック群にあたるグループ1・2は、1・2はほぼ均質にV層を主体とした出土層位であることがわかる。グループ1・2はほぼ均質にV層を主体とした出土層位であることがわかる。

いっぽう、外縁部の2つのブロック群は3・4類が目立ちやや層位的に上位に位置する傾向がみられた。しかし、当該期の特徴を示す斧形石器や台形石器が含まれており、さらに環状ブロック群と外縁部ブロック群には接合関係があり、共時性があると理解される。出土層がやや上位にあり、環状ブロック群とは若干異なる遺物の遺存状態であることが確認された。

ブロックの規模も確認しておこう。ここでは出土点数で三つに分けてみる。一〇〇点未満の小規模ブロックをA類、一〇〇点以上五〇〇点未満の中規模ブロックをB類、五〇〇点以上の大規模ブロックをC類として、日向林B遺跡の各ブロックをみるとグループ1の環状配列ブロック群は中規模のB類を中心としながらも一部BL一一、一二のようにC類もみられる。一方グループ2の中央ブロック群はC類主体であり、相対的に環状配列ブロック群のより中央ブロック群が大規模、

表1 日向林B遺跡石器出土層位

層位 ブロック	出土点数							比率						出土層位の 類型	グループ	ブロック 規模
	I・II	III	IV	Va	Vb	VI	合計	I・II	III	IV	Va	Vb	VI			
BL1			66	105	196		367			18	29	53		1類	1A	B類
BL2			41	28	81		150			27	19	54		1類	1A	B類
BL3			4	6	87		97			4	6	90		1類	1A	A類
BL4			15	10	18		43			35	23	42		1類	1A	A類
BL5			116	96	90		302			38	32	30		5類	1A	B類
BL6			22	23	17	5	67			33	34	25	7	5類	1B	A類
BL7			26	47	56	1	130			20	36	43	1	1類	1B	B類
BL8	3		94	155	171	10	433	1		22	36	39	2	5類	1B	B類
BL9	1		82	148	126	21	378			22	39	33	6	5類	1C	B類
BL10	5		9	85	105	7	211	2		4	40	50	3	2類	1C	B類
BL11	10		115	237	377		739	1		16	32	51		1類	1C	C類
BL12	4	14	82	236	249		585	1	2	14	40	48		2類	1C	C類
BL13		1	4	4	5		14		7	29	29	36		5類	1C	A類
BL14		19	52	128	208		407		5	13	31	51		1類	1C	B類
BL15		17	35	42	53		147		12	24	29	36		5類	1C	B類
BL16	1	21	38	232	248		540		4	7	43	46		2類	2	C類
BL17	15	51	198	376	610		1250	1	4	16	30	49		1類	2	C類
BL18	14	25	165	339	401		944	1	3	17	36	52		1類	2	C類
BL19	7	10	84	102	85		288	2	3	29	35	30		5類	2	B類
BL20	29	30	97	295	317		768	4	4	13	38	41		1類	2	C類
BL21			10	3	2		15			67	20	13		4類	3	A類
BL22	4	20	228	135	157	1	545	1	4	42	25	29		4類	3	C類
BL23		1	21	41	24	1	88		1	24	47	27	1	3類	3	A類
BL24		1	3	6	7		17		6	18	35	41		1類	4	A類
BL25		2	14	22	15		53		4	26	42	28		3類	4	A類
BL26	1	1	20	39	24		85	1	1	24	46	28		3類	4	A類
BL27		5	25	23	27		80		6	31	29	34		5類	4	A類
BL28		2	18	13	15		48		4	38	27	31		5類	4	A類
BL29			9	4	5		18			50	22	28		4類	4	A類
BL30		1	20	17	11		49		2	41	35	22		4類	4	A類

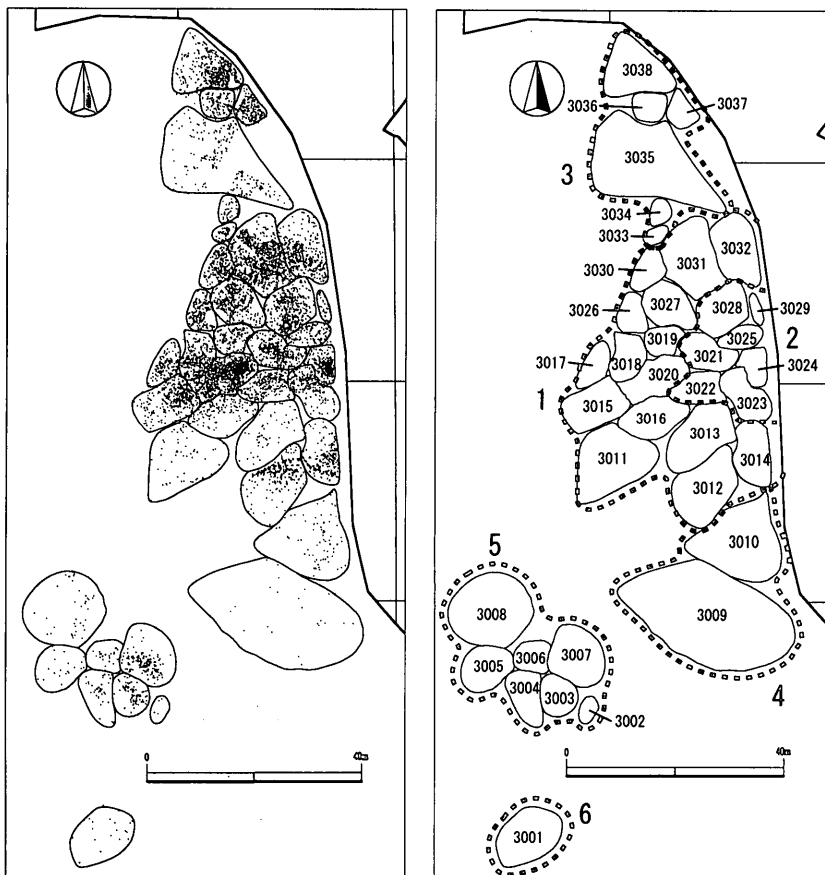


図3 貫ノ木遺跡第3地点のブロック配置

遺物の密度が高い傾向にある。外縁部のグループ3・4はB・L二を除き、小規模ブロックで構成されている。日向林B遺跡の環状ブロック群は、石器ブロックの規模からすれば、中央ブロック群から環状配列ブロック群、そして外縁部のブロック群へと中心から外に向かって規模が小さくなっているといえよう。

(2) 貫ノ木遺跡第3地点のブロック群(図3)

貫ノ木遺跡第3地点I石器文化の検討に入ろう。貫ノ木遺跡第3地点では三八か所のブロックを認定した。遺物層点数は石器八七九点、礫一七六四点である。報告書では、ブロック群の平面的分布状況を南から五つにグルーピングをした。今回、日向林B遺跡の環状ブロック群との比較検討を有効におこなうため、以下

二つの環状ブロック群

のようにグループピングを再構成した。

グループ 1 環状配列ブロック群で、B L三〇二一〜三〇二〇、

B L三〇二六・三〇二七、B L三〇三〇〜三〇三三

二の計一五ブロック。

グループ 2 中央ブロック群で、B L三〇二一〜三〇二五・三

〇二八・三〇二九の七ブロック。

グループ 3 環状ブロック群の北側外縁部に接して形成された

ブロック群で、B L三〇三三〜三〇三八の六ブロッ

ク。

グループ 4 環状ブロック群の南側外縁部に接して形成された

ブロック群で、B L三〇〇九・三〇一〇の二ブロッ

ク。

グループ 5 地点南半部に独立して形成されたブロック群でB

L三〇〇二〜三〇〇八の七ブロック。

グループ 6 地点南端の単独ブロックでB L三〇〇一。

この第3地点もグループ1・2の環状ブロック群とグループ3以降の外縁部のブロック群で構成される点は日向林B遺跡とよく似ている。

ブロックごとの出土層位を表2に示した。貫ノ木遺跡第三地点の場合、狭いテラス状の地形で、土層の堆積が全体的に薄かったため、土層断面図ではa・b・cに分層できるが、遺物取り上げでは分けて取り上げることができず、V層一括で取り上げた。全体的にはV層出土三三三六八点(四一割)、IV層出土が二九一八点(二三割)、III層出土が二二二九点(二四割)出土しており、日向林B遺跡のV層出土が七〇割代であったことからすると、第3地点は明らかにIII・IV層出土遺物が多い。ブロックごとの出土層位は、以下のように類型化できる。

表2 貫ノ木遺跡第3地点石器出土層位

層位 ブロック	出 土 点 数						比 率					ブロック の傾斜度	出土層位 の 類 型	グループ	ブロック 規 模
	I・II	III	IV	V	VI	合計	I・II	III	IV	V	VI				
3001	16	4				20	80	20				不明	6 類	6	A 類
3002		5				5		100				不明	5 類	5	A 類
3003		26	57	6		89		29	64	7		5	3 類	5	A 類
3004		32	7	5		44		73	16	11		10	5 類	5	A 類
3005		19	2			21		90	10			15	5 類	5	A 類
3006		2	23	2		27		7	85	7		12	3 類	5	A 類
3007		12	32	114		158		8	20	72		8	1 類	5	B 類
3008		9		32		41		22		78		15	1 類	5	A 類
3009	8	9	4	4	1	26	31	35	15	15	4	15	7 類	4	A 類
3010	7	54	14	6		81	9	67	17	7		8	5 類	4	A 類
3011		35	21	6		62		56	34	10		15	5 類	1	A 類
3012	1	24	97	163	4	289		8	34	56	1	15	1 類	1	B 類
3013		14	32	9		55		25	58	16		5	3 類	1	A 類
3014	2	21	65	145	3	236	1	9	28	61	1	8	1 類	1	B 類
3015	3	163	156	25	1	348	1	47	45	7		15	4 類	1	B 類
3016	10	97	43	2		152	7	64	28	1		15	5 類	1	B 類
3017		12	62	80		154		8	40	52		15	2 類	1	B 類
3018	6	70	123	134	3	336	2	21	37	40	1	15	1 類	1	B 類
3019		20	81	34		135		15	60	25		8	3 類	1	B 類
3020	34	215	460	307	58	1074	3	20	43	29	5	15	3 類	1	C 類
3021		13	119	241		373		3	32	65		8	1 類	2	B 類
3022		53	172	39	5	269		20	64	14	2	8	3 類	2	B 類
3023	1	9	74	123		207		4	36	59		8	1 類	2	B 類
3024		2	28	333		363		1	8	92			1 類	2	B 類
3025		18	40	52		110		16	36	47			1 類	2	B 類
3026		66	108	41		215		31	50	19		15	3 類	1	B 類
3027		121	104	162		387		31	27	42		10	1 類	1	B 類
3028		65	149	225		439		15	34	51			1 類	2	B 類
3029		7	6	20		33		21	18	61			1 類	2	A 類
3030		153	56	53		262		58	21	20		12	5 類	1	B 類
3031		189	385	516		1090		17	35	47		8	1 類	1	C 類
3032		58	78	296		432		13	18	69			1 類	1	B 類
3033		33	7	10		50		66	14	20		8	5 類	3	A 類
3034		29	3	18		50		58	6	36		15	5 類	3	A 類
3035		103	66	48		217		47	30	22		0-15	5 類	3	B 類
3036		63	26	40		129		49	20	31		15	5 類	3	B 類
3037		80	81	80		241		33	34	34		8	7 類	3	B 類
3038		207	130	192		529		39	25	36		15	5 類	3	C 類

- 1類 V層出土が最も多く、四〇層を超える。一四ブロック。
- 2類 V層とIV層の出土がほぼ等しい。一ブロック。
- 3類 IV層出土が最も多く、四〇層を超える。七ブロック。
- 4類 IV層とIII層の出土がほぼ等しい。一ブロック。
- 5類 III層出土が最も多く、四〇層を超える。一二ブロック。
- 6類 I・II層出土が最も多く、四〇層を超える。一ブロック。
- 7類 I・II層・III層・IV層・V層と各層から三〇層ほど出土し、ピークが認められない。二ブロック。

七類に分かれた出土層類型を先に分けたグループごとに見ていくことにしよう。環状配列ブロック群のグループ1は1類から5類まで、つまりV層主体のブロックからIII層が主体のブロックまでバラエティーに富んでいる。いっぽう中央ブロック群としたグループ2はこの第3地点も1類のV層出土が多い傾向にあるが、圧倒的にV層に集中していた日向林B遺跡に比べ、貫ノ木遺跡はIV層やIII層の出土も多い点が大きく異なる。

貫ノ木第3地点は南北に長い西向きの中位のテラスに形成されたことは先に述べた。全体的に西向かったの傾斜がある。そしてテラスのなかでも東よりは安定していて、垂直分布をみても水平堆積に近いが、西よりになると斜面に向かって傾斜がきつくなる。土の移動とともに遺物の拡散が大きいことが十分に想定される。そこで表2のなかで、ブロック遺物の垂直分布の傾斜度を測定してみた。ほぼ水平のものから一五度前後まで報告書の垂直分布図から測定した。全体傾向として出土層位類型1類は傾斜度一〇度未満のものが多く、より上層出土の多い5類になると一五度前後の値が多くなり、傾斜度がきつくなるほど上層遺物が多いという関係がありそうである。貫ノ木第3地点は、遺跡の形成された地形上の点から遺物の自然による上下動が影響し、石器の出土層位が上層にまで及んでいる可能性はあるようである。しかし、いっぽうで槍先形尖頭器や円形搔器など、I石器文化には伴いそうもない石器がみられ、複数の石器文化が重複している存在していることも確かであるが、その量は多くはなさそうである。現状では結論は

出せないが、日向林B遺跡に比べ、貫ノ木遺跡第3地点は同じI石器文化でありながらも、石器出土層位が厚く、上層まで達する傾向にあるといえるのではないだろうか。

ブロック規模については、日向林B遺跡と同様の基準で分けた。グループ1の環状配列ブロック群では大規模なC類が二、中規模B類が一、小規模A類が二、グループ2の中央ブロック群ではB L三〇二九がA類のほかはB類であった。ただ、B L三〇二九は調査区の隅にあり、完掘していないため、規模の基準にはならないと考えられる。外縁部にあたるグループ3〜6は小規模なA類が多かった。日向林B遺跡と比較すると、大規模なC類が中央ブロック群を構成するのに対し、貫ノ木遺跡の中央ブロック群は必ずしも大規模ではなく、環状配列ブロック群に大規模ブロックが形成されるという異なった様相を示している。

2 礫の出土状況

(1) 日向林B遺跡

次に礫の出土状況についてみてみよう。日向林B遺跡では全体で七四点しかなく、またブロック内でもまとまる様子はない。ほとんどが数点で、五人以上を出したブロックはB L二(五点)、B L九(六点)、B L一一(二点)、B L一二(八点)である。最大の礫は四・九五^{グラム}で、一^{グラム}を超える大型礫は六点で、多くが小礫である。焼けたと考えられる赤化礫も一〇点余と少なく、火処を想定するような遺構を見出すことはできない。礫については、後述する貫ノ木遺跡との大きな違いとして、礫群もしくは赤化礫がほとんどないというのが日向林B遺跡のI石器文化であるといえよう。

(2) 貫ノ木遺跡

貫ノ木遺跡第3地点では一五基の礫群が確認された。礫群は石器ブロックに比べ遺物の上下動が少ないため石器文化の生活面の層準を推定するのに役立つ面をもっている。石器と礫群の関係はブロックの主体となすレベルよりも礫群のレベルの方が下になることが従来の調査から経験的な知見として得られている。

それらの中心となる出土層位でみていくと、Ⅰ石器文化に対応するであろうⅤ層の礫群は三基で、他の一二基は上層であるⅢⅣ層が出土の主体となる。三基の礫群は他の一二基と比べ、礫構成に違いが見られた。点数が少なく、大型礫が多いという点である。礫群自身の使用のあり方にⅠ石器文化と上層の礫群とは違いが見いだせる。石器ブロックより上層に同時期の礫群は通常ないことから、これらⅢⅣ層に相当する石器文化の石器ブロックがこの第3地点にもあったことが想定される。石器ブロックの垂直分布からは明瞭に上層の石器文化がどのブロックであるかを分離はできなかったが、Ⅰ石器文化には組成しない槍先形尖頭器が出土していることから上層の石器文化の重複をこの第3地点では考慮しなければならぬことは先にも述べた。礫群の一五基はこの第3地点の北側に偏る分布を示す。ブロックのグループでみれば環状配列ブロック群のグループ1北半、中央ブロック群の北寄り一部とグループ3にあたる。Ⅰ石器文化に相当する三基の礫群はBL三〇三・三〇三・三〇三と平面的に重なる。貫ノ木遺跡では環状配列ブロック群のグループ1の一部に礫群が形成されていたことになる。

三 石材構成の検討

前節では石器ブロックや、礫・礫群の分布について検討したが、ここでは、ブロック、ブロックグループの石材構成を検討してみる。野尻湖遺跡群では数多くの石材が使用されている。日向林B遺跡では一三種類、貫ノ木遺跡では二一種類の石材が確認された。ここでは傾向を把握する目的のため、両遺跡とも一〇点以下の少数石材は検討の対象からははずすことにした。さらに今回は斧形石器および剥片石器を分析の対象とするため、大形石器の石材である安山岩と砂岩も少数石材とともにはずした結果、日向林B遺跡では六種の石材（黒曜石、無斑晶質安山岩、玉髄、蛇紋岩、珪質頁岩、凝灰岩）を対象とした。また、貫ノ木遺跡では九種（日向林Bの六種のほかに頁岩、珪質凝灰岩、チャート）を対象とした。

日向林B遺跡の主要石材を表3に示した。圧倒的に黒曜石が多く六四四五点で全体の七十二割、ついで玉髄が一九〇〇点で二二割、三番目の石材として無斑晶質

表3 日向林B遺跡主要石材の構成

グループ	ブロック	主要石材の出土点数							主要石材の出土比率						
		黒曜石	玉髄	安山岩	無斑晶質	蛇紋岩	珪質岩	凝灰岩	総点数	黒曜石	玉髄	安山岩	無斑晶質	蛇紋岩	珪質岩
1A	BL1	276	107	1	2	1	1	391	70.6	27.4	0.3	0.5	0.3	0.3	
1A	BL2	123	22		1			146	84.2	15.1		0.7			
1A	BL3	82	16			1		99	82.8	16.2			1.0		
1A	BL4	21	24		1			47	44.7	51.1		2.1			
1A	BL5	209	83		14	2		308	67.9	26.9		4.5	0.6		
1B	BL6	55	13		5	6		80	68.8	16.3		6.3	7.5		
1B	BL7	26	6	102	2			137	19.0	4.4	74.5	1.5			
1C	BL8	383	14	55	6	4	1	464	82.5	3.0	11.9	1.3	0.9	0.2	
1C	BL9	303	70	5	13	1		392	77.3	17.9	1.3	3.3	0.3		
1C	BL10	162	22	1	19	4	1	211	76.8	10.4	0.5	9.0	1.9	0.5	
1C	BL11	563	160	6	7	1	2	746	75.5	21.4	0.8	0.9	0.1	0.3	
1C	BL12	464	86		15	4	3	577	80.4	14.9		2.6	0.7	0.5	
1C	BL13	9	4		1			14	64.3	28.6		7.1			
1C	BL14	234	144		22	1	1	403	58.1	35.7		5.5	0.2	0.2	
1C	BL15	42	102	1				146	28.8	69.9	0.7				
2	BL16	457	76	1	1	3		539	84.8	14.1	0.2	0.2	0.6		
2	BL17	933	297	6	9	2		1248	74.8	23.8	0.5	0.7	0.2		
2	BL18	701	206	10	20	4		941	74.5	21.9	1.1	2.1	0.4		
2	BL19	206	54	29		1		290	71.0	18.6	10.0		0.3		
2	BL20	568	180	1	10	7	1	768	74.0	23.4	0.1	1.3	0.9	0.1	
3	BL21		1	9			4	14		7.1	64.3				28.6
3	BL22	527	1	11	3			542	97.2	0.2	2.0	0.6			
3	BL23	82			4			86	95.3			4.7			
4	BL24	4	7	6			1	18	22.2	38.9	33.3				5.6
4	BL25	1	30	21			1	53	1.9	56.6	39.6				1.9
4	BL26	1	59	18	1	2	2	83	1.2	71.1	21.7	1.2	2.4	2.4	
4	BL27	11	54	13		1		79	13.9	68.4	16.5		1.3		
4	BL28		13	31	1		2	47		27.7	66.0	2.1			4.3
4	BL29		12	5		1		18		66.7	27.8		5.6		
4	BL30	2	37	6		1		46	4.3	80.4	13.0		2.2		
	合計	6445	1900	338	157	47	20	8933							

安山岩が三三八点で四割とかなり低い比率になる。ブロック別に石材組成をみると、環状配列および中央ブロック群のグループ1・2は全体傾向の比率と同じく黒耀石を主体として、玉髓が第二の石材となっているが、なかでB L四と一五では玉髓が黒耀石を上回ったり、B L七・八では無斑晶質安山岩の比率が高くなり、環状配列ブロック群がすべてにおいて同じ傾向にあるわけではないようである。しかし黒耀石以外の石材が比率上高くなる先のブロックは出土点数が四七点、一三七点、一四七点と少ないブロックに見られる現象であり、全体としては、日向林B遺跡の環状ブロック群は黒耀石を主体としたブロック群で構成されるという石材の均質化傾向はその特徴として挙げられる。

外縁部のブロックは先のブロック群とは異なる様相を示している。グループ3では黒耀石が九五割と非常に高い比率をもつB L二・三と黒耀石をもたず無斑晶質安山岩や凝灰岩をもつB L二で構成される。グループ4は黒耀石の比率が低く、玉髓と無斑晶質安山岩で構成されている。以上日向林B遺跡の石材組成をみると環状ブロック群と外縁部のブロック群に大きな差がみられ、また環状配列ブロック群のなかでも若干の組成を異にするブロックがあることがわかる。

貫ノ木遺跡は日向林B遺跡ほど主要石材の偏りはなく、分散傾向にある(表4)。貫ノ木遺跡では無斑晶質安山岩が最も多く、三四三一点で三九割、ついで黒耀石二八一九点で三二割さらにチャート六八七点で八割、凝灰質頁岩六〇六点で七割、凝灰岩五六七点で六割と続く。日向林B遺跡で多かった玉髓は貫ノ木遺跡では一割未満であり、同じ

表4 貫ノ木遺跡第3地点主要石材の構成

グループ	遺構番号	主要石材の出土点数												主要石材の出土比率												
		無斑晶質安山岩	黒耀石	チャート	珪質頁岩	頁岩	凝灰質頁岩	珪質凝灰岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	玉髓	鉄石	蛇紋岩	総点数	無斑晶質安山岩	黒耀石	チャート	珪質頁岩	頁岩	凝灰質頁岩	珪質凝灰岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	玉髓	鉄石	蛇紋岩
1	3011	4	24	3	1		5	5	20				62	6.5	38.7	4.8	1.6		8.1	8.1	32.3					
1	3012	19	247	5	3	1	3	3	6	1			289	6.6	85.5	1.7	1.0	0.3	1.0	1.0	2.1		0.3			
1	3013	10	27	4		1	4	1	6				55	18.2	49.1	7.3		1.8	7.3	1.8	10.9					
1	3014	90	104	3	1		2	5	29				236	38.1	44.1	1.3	0.4		0.8	2.1	12.3					
1	3015	200	34	35	4		32	7	31	1			348	57.5	9.8	10.1	1.1		9.2	2.0	8.9		0.3			
1	3016	24	23	20	1	1	45	2	32	1			152	15.8	15.1	13.2	0.7	0.7	29.6	1.3	21.1		0.7			
1	3017	121	14	8	3		4		2	1			154	78.6	9.1	5.2	1.9		2.6		1.3		0.6			
1	3018	136	108	24	2		16	4	24	12			336	40.5	32.1	7.1	0.6		4.8	1.2	7.1		3.6			
1	3019	87	22	8	3	2	2	1	3	3			135	64.4	16.3	5.9	2.2	1.5	1.5	0.7	2.2		2.2			
1	3020	442	119	140	26	6	157	30	120	1	7	1	12	1074	41.2	11.1	13.0	2.4	0.6	14.6	2.8	11.2	0.1	0.7	0.1	1.1
1	3026	146	50	7	2		1		6	1			215	67.9	23.3	3.3	0.9		0.5		2.8		0.5			
1	3027	230	101	10	15		10		8	9			387	59.4	26.1	2.6	3.9		2.6		2.1		2.3			
1	3030	206	33	3	2	1	6		1	5			262	78.6	12.6	1.1	0.8	0.4	2.3		0.4		1.9			
1	3031	770	257	5	7	1	9	2	25		1	1	1	1090	70.6	23.6	0.5	0.6	0.1	0.8	0.2	2.3		0.1	0.1	0.1
1	3032	116	270	1	9		5	1	22	1		2	432	26.9	62.5	0.2	2.1		1.2	0.2	5.1	0.2	0.2		0.5	
2	3021	135	187	19	1		7	3	8	1		1	373	36.2	50.1	5.1	0.3		1.9	0.8	2.1		0.3		0.3	
2	3022	50	67	24	10	3	45	10	50	1		4	269	18.6	24.9	8.9	3.7	1.1	16.7	3.7	18.6		0.4		1.5	
2	3023	21	166	8			1	3	7				207	10.1	80.2	3.9			0.5	1.4	3.4					
2	3024	25	324	5			1		7				363	6.9	89.3	1.4			0.3		1.9					
2	3025	12	95	2									110	10.9	86.4	1.8										
2	3028	105	257	7	5	1	20	6	34			1	439	23.9	58.5	1.6	1.1	0.2	4.6	1.4	7.7				0.2	
2	3029	10	19					1	2				33	30.3	57.6					3.0	6.1					
3	3033	23	23	1	3								50	46.0	46.0	20.0	6.0									
3	3034	7	11		15		13	1	2		1		50	14.0	22.0		30.3		26.0	2.0	4.0			2.0		
3	3035	60	83	33	8	1	12		7	4	4	1	217	27.6	38.2	15.2	3.7	0.5	5.5		3.2	1.8	1.8	0.5		
3	3036	54	8	33	2	1	11	2	12				129	41.9	6.2	25.6	1.6	0.8	8.5	1.6	9.3					
3	3037	38	56	84	4		5	11	36	1	1	1	241	15.8	23.2	34.9	1.7		2.1	4.6	14.9	0.4	0.4	0.4		
3	3038	149	46	162	98	1	35	8	20		4	1	529	28.2	8.7	30.6	18.5	0.2	6.6	1.5	3.8		0.8		0.2	
4	3009	5	10	1	1		6		1		1		26	19.2	38.5	3.8	3.8		23.1		3.8			3.8		
4	3010	9	5	14	2		27	2	13	5	2		81	11.1	6.2	17.3	2.5		33.3	2.5	16.0		6.2	2.5		
5	3002											5	5												100.0	
5	3003	34	1		2	9	28	6	8			1	89	38.2	1.1		2.2	10.1	31.5	6.7	9.0				1.1	
5	3004	23		1	3	1	15	1					44	52.3		2.3	6.8	2.3	34.1	2.3						
5	3005	1	1	3		1	10		3			1	21	4.8	4.8	14.3		4.8	47.6		14.3				4.8	
5	3006	7		2		5	9	1	2				27	25.9		7.4		18.5	33.3	3.7	7.4					
5	3007	41	1	4	15	27	39	10	17	2		1	158	25.9	0.6	2.5	9.5	17.1	24.7	6.3	10.8		1.3		0.6	
5	3008	7			1	11	18	1	2				41	17.1			2.4	26.8	43.9	2.4	4.9					
6	3001	5	7	1	1	1	2					1	20	25.0	35.0	5.0	5.0	5.0	10.0						5.0	
	外	9	19	7	2		1	1	1	2		1	46	19.6	41.3	15.2	4.3		2.2	2.2	2.2		4.3		2.2	
	合計	3431	2819	687	252	75	606	128	567	7	63	8	32	8795												

遺跡群でありながら石材の使用頻度に大きな違いが指摘できる。ブロック別に石材組成をみると、グループ1の環状配列ブロック群は主要石材のあり方の違いで三つに区分される。グループ1の中をA・B・Cに細分しておこう。

グループ1A 無斑晶質安山岩を主体とするブロックで、BL三〇一五、三〇一七、三〇二〇、三〇二六、三〇二七、三〇三〇、三〇三一と環状配列ブロック群でも西側の一角に隣接して位置している。

グループ1B Aの南側に配列されるブロック群で黒耀石を主体とするBL三〇一一、三〇一四と、凝灰質頁岩、凝灰岩が多いBL三〇一六である。

グループ1C Aの北東隣に位置するBL三〇三二で黒耀石が主体をなすブロックである。

グループ2の中央ブロック群はすべてのブロックで黒耀石が主体となる点、日向林B遺跡の中央ブロック群と共通しているといえる。一方で黒耀石比率をみると違いが指摘でき、A・Bに二分される。

グループ2A より中心部に位置すると考えられるBL三〇二三、三〇二五の三ブロックは八〇割以上の高い比率を示している。これは日向林B遺跡の中央ブロック群の黒耀石比率が七〇、八〇割であることと共通する。

グループ2B 2Aと環状配列ブロック群の間に位置するBL三〇二一、三〇二八、三〇二九は黒耀石の比率が五〇割台と低くなり、無斑晶質安山岩が増え、より環状配列ブロック群のグループ2に近い石材構成をとる。BL三〇二二も凝灰質頁岩、凝灰岩の比率が一定程度あり、グループ2Bの石材構成に近い。黒耀石の比率が非常に高い2Aと無斑晶質安山岩や凝灰岩系の石材を持つグループ1A、1Bとの中間的位置にこのグループ2Bが位置すると理解され、石材の構成からみると貫ノ木遺跡第3地点の環状ブロック群は中央ブロック群、環状配列ブロック群、その間の中間部に位置するブロック群の三重構造になっていると理解できるのではないだろうか(図4)。

外縁部のブロック群では無斑晶質安山岩、黒耀石、チャート、珪質頁岩、凝灰

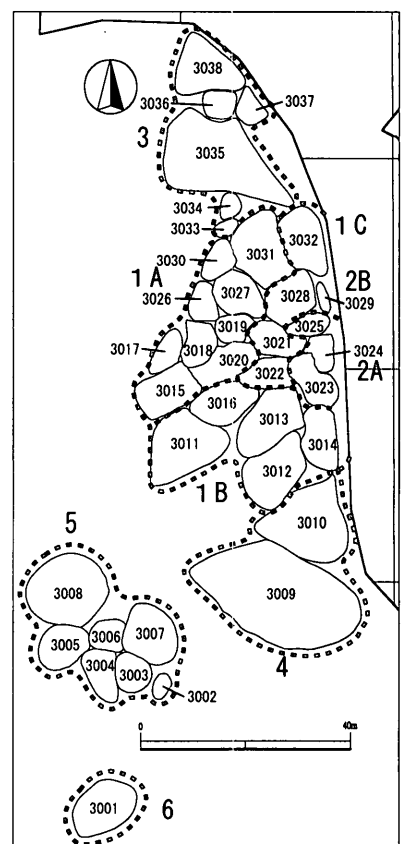


図4

質頁岩など個々のブロックによって石材が異なっている状況が見てとれた。

以上、貫ノ木遺跡第3地点の環状ブロック群は、石材構成からグループ1のA・B・C、グループ2のA・Bの計5つの小グループに分けることが可能となった。では石材構成のこの五つのグループの違いは何を意味しているのであろうか。

野尻湖周辺では石器製作に適した石材は採取できない石材環境にある。一番近距離の石材が無斑晶質安山岩で、遺跡群東方約二五メートルの飯山市関田山地に求められる。野尻湖周辺遺跡群では在地の石材といってもいいだろう。黒耀石をはじめとするそれ以外の石材は遠隔地からもたらされたと考えられる。在地、遠隔地の視点で石材構成を考えると、貫ノ木遺跡第3地点は、在地の石材を主体とするブロック群がグループ1Aや一定程度有するグループ2Bなど、在地石材が優位を占めるブロック群が存在する。日向林B遺跡が黒耀石、玉髓が主体となる遠隔地系石材で構成されているのとは対照的なあり方といえよう。黒耀石の総重量が日向林B遺跡では約一五グラム、貫ノ木遺跡第3地点では約一四グラムとあまり大差がないのに比べ、無斑晶質安山岩の総重量は日向林B遺跡がわずかに四グラムであるのに対して、貫ノ木遺跡では一〇倍の四三グラムも出土している。重量では、より明確に在地石材を多用した貫ノ木遺跡の特徴が明確になったといえよう。

遠隔地石材のあり方も二遺跡では異なった様相を示している。黒耀石の産地分析を行った結果、日向林B遺跡では判別群鷹山・小深沢の和田エリアというひと

つのエリアが九五割を占めるのに対し、貫ノ木遺跡では判別群屋ヶ台の諏訪エリアが五三割、和田エリアが四六割と、日向林ではほとんど見られなかった諏訪エリアの黒耀石が搬入されているだけでなく、二大エリアの黒耀石がみられる。石材種類の豊富な貫ノ木遺跡のあり方と、産地が限定される日向林B遺跡のあり方には大きな違いとして認識される。

四 石器の検討

最後に石器のあり方について若干検討してみる。
日向林B遺跡の石器組成を表5に、貫ノ木遺跡第3地点の石器組成を表6に示した。

二遺跡の環状ブロック群を構成するグループ1の環状配列ブロック群とグループ2の中央ブロック群の遺物点数は日向林B遺跡ではグループ1が四一五三点、グループ2が三七八四点の合計七九三七点になるのに対し、貫ノ木遺跡ではグループ1が五二二四点、グループ2が一七九一点の合計七〇一五点である。貫ノ木遺跡の場合、環状ブロック群の範囲を完掘しておらず、また、重複する石器文化の存在も想定されるため総点数で二遺跡を比較するのは慎重にならなければいけないが、三分の一ほどを未調査と推定すれば一万点以上が貫ノ木遺跡の環状ブロック群の出土点数規模と考えることができるかもしれない。直径二五センチの日向林B遺跡で約八〇〇〇点の遺物、約二倍の直径五

表5 日向林B遺跡石器組成

グ ル ー プ	ブ ロ ッ ク	斧 形 石 器	台 形 石 器	ナイフ 形 石 器	搔 器 状 石 器	貝 殻 状 刃 器	削 入 器	抉 入 器	鋸 歯 縁 状 削 器	厚 刃 搔 器	彫 器	揉 錐 器	楔 形 石 器	二次 加工 のある 剥片	微 細 剥離 のある 剥片	剥 片	砕 片	斧 形 石 器 調 整 剥片	斧 形 石 器 刃 部 破片	敲 石	磨 石	砥 石	石 核	原 石	計
1A	BL1	2	1		10	77	1	1	2	1	2			5	20	165	92			2	1		9		391
1A	BL2	1	1		6	25	1	3		1		1		1	4	55	40						7		146
1A	BL3		1		4	17	3				3	2		3	3	32	29				1		2		99
1A	BL4	1	1			8				1					1	25	8			1			1		47
1A	BL5	3	1		11	52	1		1	3	1	3	3	7	14	122	75	1	0	3	2	0	9		308
小計		7	5	0	31	179	6	4	3	9	5	4	3	16	42	399	244	1					28	0	991
1B	BL6		1		6	18	1		1	1				1	6	32	4	2	1				6		80
1B	BL7		1			9	1		2	3	1			2	1	71	42			1			2	1	137
1B	BL8	4	5		10	68	4	1	4	6	1	1	1	2	13	180	148				1		15		464
小計		4	7	0	16	95	6	1	7	10	2	1	1	5	20	283	194	2	1	1	1	0	23	1	681
1C	BL9	3	7		9	69	2		5	5	8	2		5	14	127	121	1					14		392
1C	BL10	13			7	35	2	2	3	5				2	9	65	52	1	1	2			10	2	211
1C	BL11	3	1		16	85	5	1	3	13	1	2		8	30	248	300	1		2		1	21		741
1C	BL12	5			12	75	4	2	5	9	1	5		4	24	234	175	3	3	4			9		575
1C	BL13	1		1	1	1										6	4						1		14
1C	BL14	14	5		9	52	2	2	1	3	1			6	8	144	137	2	3		1		12		402
1C	BL15		1		1	16	2		2	1				1	10	78	31			1			2		146
小計		39	14	1	55	333	17	7	19	36	11	9	0	26	95	902	820	8	7	9	1	1	69	2	2481
2	BL16		1		12	52	4	2	1	3		2	1	8	29	199	206						19		539
2	BL17	1	6		36	123	3	3	5	12	1	4		19	59	390	554	2				1	28		1247
2	BL18	5	4		28	101	6	6	4	9	1	2	1	9	45	330	365						25		941
2	BL19		6	1	10	29	1	1		2		2		6	9	122	91						9		289
2	BL20	1	3		19	94	5	2	3	7		1		14	52	283	264	1		1			18		768
小計		7	20	1	105	399	19	14	13	33	2	11	2	56	194	1324	1480	3	0	1	0	1	99	0	3784
3	BL21					1									2	11									14
3	BL22	1	3		49	90	3	4	2	21	6	4		4	9	115	221	1					9		542
3	BL23	1			9	18	3	1		11	2	2		1	4	20	11						3		86
小計		2	3	0	58	109	6	5	2	32	8	6	0	5	15	146	232	1	0	0	0	0	12	0	642
4	BL24					2			1							11	2						2		18
4	BL25		1			10									3	30	7						2		53
4	BL26		4		2	15	2		2				1	2	8	29	8		1				9		83
4	BL27		3		2	13			2	1			1	1	2	41	10						3		79
4	BL28	1	1		1	4								1		33	5						1		47
4	BL29		1			2			1	1						11							2		18
4	BL30				2	5	2						1		1	30	1						4		46
小計		1	10	0	7	51	4	0	6	2	0	0	3	4	14	185	33	0	1	0	0	0	23	0	344
合計		60	59	2	276	1176	59	31	50	123	29	39	11	114	385	3276	3007	15	9	14	4	2	255	3	

表6 貫ノ木遺跡第3地点石器組成

グループ	ブロック	ナイフ形石器	台形石器	槍先形尖頭器	角錐状石器	斧形石器	貝殻状刃器	彫器	揉錐器	搔器	搔器状石器	厚刃搔器	削器	楔形石器	刃器	細石刃	二次加工のある剥片	微細剥離のある剥片	折断面剥片	砥石	敲石	台石	剥片	打面再生剥片	削片	砕片	石核	原石	計
1 A	3015	1								1			2	1	2			2			2		241			85	11	348	
1 A	3017	2										1						3					115			26	7	154	
1 A	3018	1				1				1	1			3			5	20	4		1		200			82	14	333	
1 A	3019	2	1					1		1			2		1		2	5			2		93			19	6	135	
1 A	3020	3	4			6	1			2	2	1	3	2			11	26		2	2		774			184	51	1074	
1 A	3026	2		1			2			1			1				4	5	2		1		153			31	12	215	
1 A	3027	5	2	2			2					1	2		3		9	17	2		3		269		1	52	15	2 387	
1 A	3030		3				1			2				4	1		4	5			2		189			42	8	1 262	
1 A	3031	6	6		1	1	5	1	1	1	3	1	11	2			22	41	4	1	8		725			209	36	5 1090	
小計	22	16	3	1	8	11	2	1	9	6	4	25	9	6	0	57	124	12	3	21	0	2759	0	1	730	160	8	3998	
1 B	3011	1															2	3		1			42			8	4	1 62	
1 B	3012	2	4					1		1	1			3		1	5	19	1				187			57	5	2 289	
1 B	3013	2	1										1	2	1		2	9			2		24			9	2	55	
1 B	3014	2	5				2				1		2				2	12	1				156		1	44	8	236	
1 B	3016	1	2			1				1				1			3	11					112			11	9	152	
小計	8	12	0	0	1	2	1	0	2	2	0	7	2	1	3	0	14	54	2	1	2	0	521	0	1	129	28	3 794	
1 C	3032	6	6				9	2	1		2		2	1	1		8	37	7		4		225			106	15	432	
小計	6	6					9	2	1		2		2	1	1		8	37	7		4		225			106	15	432	
2 A	3023	5	7				1						2	1	1		8	27		1		1	90			61	2	207	
2 A	3024	3	3				1				2		1		2		10	33	3				125			177	3	363	
2 A	3025	6	6				4				1						4	14	1		1		53			15	4	1 110	
小計	14	16	0	0	0	6	0	0	0	3	0	3	1	3	0	22	74	4	1	1	1	268	0	0	253	9	1 680		
2 B	3021	2	12			2	1					1	1				8	21	3		1		180			136	4	372	
2 B	3022		3			2	1						1	1	2		2	21		1	1		184			37	10	2 268	
2 B	3028	10	11	1		2	4	2			1	5	4	1	4		11	37	6		2		247		1	73	14	2 438	
2 B	3029						1					1						2		1	1		20			6	1	33	
小計	12	26	1	0	6	7	2	0	0	1	7	6	2	6	0	21	81	9	2	5	0	631	0	1	252	29	4 1111		
3	3033		2					1					2				2	4	2				36				1	50	
3	3034	1		1				2					1		2		1	3	1				32			2	4	50	
3	3035	1	5			1					1		1	3			2	18	5		2		139		1	23	14	1 217	
3	3036									2				2			2	1			4		102			7	9	129	
3	3037		2			1										1	4	5					170	2		29	26	1 241	
3	3038	3	3			1		3					1	3	8	1	8	4	5		3		383	3		71	29	529	
小計	5	12	1	0	3	0	6	0	2	1	0	5	8	10	2	19	35	13	0	9	0	862	5	1	132	83		1214	
4	3009	1											3				1	2		1			18					26	
4	3010													1			2	3			2		65			3	3	2 81	
小計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	3	5	0	1	2	0	83	0	0	3	3	2 107		
5	3002																						5					5	
5	3003	1											1	3			2						66			13	3	89	
5	3004												2				1						31			6	3	1 44	
5	3005					1											1						18			1		21	
5	3006									1			1				3				1		17			3	1	27	
5	3007		1							1			2	1	1			6			3		120			16	7	158	
5	3008																	3					34			2	2	41	
小計	1	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	6	4	1	0	7	9	0	0	4	0	291	0	0	41	16	1 385	
6	3001					1							2					1		2			9			5		20	
小計					1								2					1		2			9			5		20	
合計	70	89	6	1	20	35	13	2	15	15	11	59	28	29	2	154	426	47	10	50	1	5674	5	4	1658	343	22		

○¹と推定される貫ノ木遺跡で一万点の遺物とすると、日向林B遺跡の遺物密集度の高さが指摘できよう。

石器器種の偏りはどうか。日向林B遺跡の環状配列ブロック群であるグループ1は連鎖するブロック群間に空間を見だし、平面分布上からABCに三分したが、その小群のうちCをBL九―一の東群とBL二―一五の西群にさらに細分して、A・B・C東・C西の四群で石器組成をみると、台形石器は各小群に五点、七点、八点、六点と均質に含まれる。斧形石器は、グループ1Cの東群、西群にそれぞれ集中して保有するBL一〇とBL一四がある。BL一〇では五〇¹の範囲内に一点の、BL一四では一×二¹の範囲内に一三点が集中して出土するという特異なあり方を示す。その特異な出土状況を除けばグループ1は全体的に数点の斧形石器が保出土しており、これも台形石器と同様、グループの小群が均質な傾向を示しているといえよう。そして、中央ブロック群も斧形石器は七点で、グループ1の小群とほぼ同様な出土数を示している。

日向林B遺跡の環状ブロック群は空間的にもほぼ四等分される環状配列ブロック群と中央ブロック群の計五つのブロック小群が、ある一定の規則をもって残されていたと理解できるのではないだろうか。

それに比べ貫ノ木遺跡の環状ブロック群はその小群をみても個個に格差があり、いわゆる均質性を見出すのは難しい。斧形石器を一ブロックで六点出土したBL三〇二〇も日向林B遺跡のような集中ではなく、ブロックの範囲内に分散するなど、日向林B遺跡と同じ様相を抽出することはむしろできない。

さらに主要器種のあり方を検討することによって、両遺跡の類似点と相違が出てくるものと思われるが、本稿ではそこまで検討できなかった。この点については別稿で取り組みたいと考えるが、その際の視点となる項目をあげておきたい。

斧形石器についてであるが、重要な視点のひとつに石材があげられる。日向林B遺跡の斧形石器はすべてが蛇紋岩製であるのに対し、貫ノ木遺跡も主体は蛇紋岩であるが、非蛇紋岩製の石材もそれなりに用いている点が注目される。環状ブロック群を特徴付ける斧形石器のあり方も二遺跡では違った様相を示している。

つぎにナイフ形石器・台形石器である。報告書ではこのナイフ形石器と台形石器の定義を以下のようにした。剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器で、全体形状で先端を尖らせているものをナイフ形石器とし、台形石器は剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工するところはナイフ形石器と同じであるが、石器長軸に直交もしくは斜交する刃部をもつものとして分離した¹²。

日向林B遺跡ではほとんどが台形石器に偏るのに対し、貫ノ木遺跡では各種のナイフ形石器・台形石器が存在する。その点では日向林B遺跡にはこれらナイフ形石器類に偏りがあり、あるひとつの目的で遺跡が形成された可能性が高いことを推定した。この様相の違いを個個のブロックや今回区分したブロックのグループという枠のなかでのあり方を検討し、さらにナイフ形石器、台形石器の製作上の特徴を加味することでブロック群を残した集団などが推定できるのではないかと考えている。ナイフ形石器類に偏りがある日向林B遺跡とバラエティーをもつ貫ノ木遺跡は、同じ環状ブロック群をもつとしても機能の違いを見いだすことも明瞭な現象であるといえよう。

また、斧形石器に関連する資料として砥石のあり方も重要である。日向林B遺跡は2点が検出されたが、貫ノ木遺跡では五点が出土した。重量九¹³gを測る大形砥石もあり、貫ノ木遺跡第3地点の性格を考える上でも重要な資料となつてこよう。

以上、主要な器種を今後検討の材料に加えることで、両遺跡の性格がより明瞭にでてくるものと考えている。

五 まとめ

環状ブロック群の内容については、ブロックが均質化するという理解がなされているが、小稿では均質化してみえる環状ブロック群を再検討することで、環状ブロック群の構成をとらえ直すことを目的とした。以下に仮説を含めブロック群の解釈をし、まとめとして列記する。

(1) 二遺は跡立地に違いがみられた。日向林B遺跡は低地を前面に臨む低位のテラスに形成されたのに対し、貫ノ木遺跡は中位のテラスに形成された。低地近くに形成されたブロック群の解釈として、低地で足を奪われた大型獣（ナウマンゾウなど）を狩猟し、獲物の移動を少なくするため狩猟場に近いところに環状ブロック群を形成したという解釈が、野尻湖遺跡群における「大型獣解体場説」のひとつの根拠としてきた。しかし貫ノ木遺跡の立地はそれとは違い、同じ遺跡群内にある環状ブロック群であっても同じ性格ではないことを考えないといけないことが立地から想定される。

(2) 遺跡内での石器文化とその周囲の遺跡を検討した。日向林B遺跡では一時期大規模な遺跡が形成されるが、同時期とその後により大きな遺跡が密集して形成されていない。いっぽう、貫ノ木遺跡は対照的に隣接する地点でも同時期も石器文化が相当量確認され、また後の時代の石器文化も確認されている。その点貫ノ木遺跡は先土器時代の各時期を通して集団が常に訪れた場所であったことが推定される。

(3) 石器の出土層位は日向林B遺跡よりも貫ノ木遺跡の方がバラツキが多いことはより長い期間、貫ノ木遺跡第3地点という場が先土器時代人にとって頻繁に利用された想定できないだろうか。地表に散布した石器・石片がいったいどのくらいの時間で埋没するのだろうか。それは当時の気候や地形によって異なってくるであろうから、その推定は難しい。しかし、野尻湖周辺は確かにローム層から重層的に石器群がレベル差をもって出土する。しかしいっぽうでその重層的な石器文化を明瞭に区分できるほど厚みはもっていない。当時も数十年もしくは数百年の時間的な差があっても、地表面に散布する石片などによって後代の集団がブロック形成に規制を及ぼすことも想定できるのではないだろうか。石片の散布する近辺に累積的に集団が訪れ、逗留したとすれば結果としてのひとつの分布域を形成することも十分に考えられる。いまここですぐに結論できることではないと思われるが、貫ノ木遺跡の環状ブロック群はそのような結果残されたのではないだろうか。

(4) 日向林B遺跡には礫群は認められなかったが貫ノ木遺跡で環状配列ブロック群の一角に確認された。礫群を火処と推定すれば日向林B遺跡では確認できなかった生活の痕跡が貫ノ木遺跡にはあったと推定される。

(5) 石材の構成を見ることによって、貫ノ木遺跡の環状ブロック群は新たに五個の小群に分けられた。これは日向林B遺跡の環状ブロック群の構成とは異なることが考えられる。

(6) 環状ブロック群の性格にはいくつかの説がある。そして日向林B遺跡は大型動物解体に伴って残された遺跡であるとすれば、貫ノ木遺跡はむしろ石器交換の場であったとも取れるようなあり方をしている。いずれにしても二遺跡の環状ブロック群は違うのである。筆者は日向林B遺跡は一機能（単機能）が残された結果の遺跡と考える。それは道具に偏りがあるからで、それはゾウなど大型動物類の解体に伴うような作業場を想定する。いっぽう、貫ノ木に石器や石材の交換、紐帯確認など、複数の生活の場を想定したい。

(7) いくつかの点で第3地点の環状ブロック群を検討してみたが、日向林B遺跡の環状ブロック群とは、かなり違う様相を呈しているのではないだろうか。遺物の分布、密度、ナイフ形石器や台形石器の形態組成、斧形石器の石材、黒曜石産地など、日向林B遺跡がシンブルであるのに対して、第3地点はすべてにバラエティーがある。諏訪星ヶ台産黒曜石の分布から環状ブロック群の存在はほぼ間違いないところであろうが、その後の累積的な使用等により、バラエティーができたとはいえないだろうか。したがって、日向林B遺跡の環状ブロック群を短期間に考えるならば、この第3地点の環状ブロック群は長期間に及んだと理解できようか。

おわりに

本稿では、野尻湖遺跡群という同じ遺跡群内における日向林B遺跡と貫ノ木遺跡の環状ブロック群を比較する基礎的操作から二遺跡の違いを明瞭にし、近接する位置にありながらも異なる機能を有する環状ブロック群の存在を証明しようとする。

考えたが、十分に検討をしなかった。今後の課題としたい。三万年前の日本列島にはこの環状ブロックが各地で発見されていてその数は一〇〇か所をこえる^⑬とされている。野尻湖遺跡群でも今回対象とした二遺跡以外からも検出されており、今後それらの遺跡も検討していきたい。二〇〇〇年の「前・中期旧石器時代遺跡ねつ造事件」以降、日本列島の人類文化の始まりは再構築を迫られた。環状ブロック群はその始まりの時期に特徴的存在するが、大陸方面では確認されていない日本列島独特の遺跡の形態であるともいえる。環状ブロック群の発生の歴史的意義を追及することは、日本列島の人類文化のはじまりを明らかにすることにつながると考える。今後とも検討していきたい。

注

1 岩崎泰一他『下触牛伏遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団、一九八六年。

2 橋本勝雄・須田良平「旧石器時代―一九八六年の動向―」『考古学ジャーナル』二七七、一九八七年。

橋本勝雄「AT降灰以前における特殊な遺物分布の様相」『考古学ジャーナル』三〇九、一九八九年。

3 日本旧石器学会『旧石器研究』第二号、二〇〇六年。

4 小菅将夫『赤城山麓の三万年前のムラ』二〇〇六年。

5 稲田孝司『先史日本を復原する1 遊動する旧石器人』二〇〇一年。

6 谷和隆「日向林I石器文化の環状ブロック群」『地域と文化の考古学I』二〇〇五年。

7 芹沢長介・麻生優「北信、野尻湖底発見の無土器文化」『考古学雑誌』第三九卷二号、一九五三年。

8 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その1・日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代 本文編・図版編』二〇〇〇年。

9 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書一五 信濃町内その1・貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代 本文編・遺構遺物図版編』二〇〇〇年。

10 注6に同じ。

11 野尻湖の標準土層を以下に示す。第I層表土、第II層黒色土（柏原黒色火山灰層、以下、カッコ内は野尻湖発掘調査団による層呼称）第III層黒褐色土ローム漸移層（モヤ）、第IV層黄褐色細粒軟質風化火山灰層（上部野尻ロームII）、第Va層褐色細粒風化火山灰層（上部野尻ロームII最下部）、第Vb層暗褐色細粒風化火山灰層（上部野尻ロームII黒色帯上部）、第Vc層（上部野尻ロームII黒色帯下部）、第VI層（上部野尻ロームI）。第VII層（中部野尻ローム）以下は遺物が発見されなかった。

12 ナイフ形石器と台形石器は大きく形態が異なるので筆者は機能の違いを想定しているが、いっぽうでこの二者は製作技術を共有することもあり、大きな区分ではナイフ形石器類ととらえ、その細分器種にナイフ形石器と台形石器を位置づけている。

13 橋本勝雄「環状ユニットと石斧の関わり」『旧石器研究』第二号、二〇〇六年。